Shu Ogawara Illustrations for the Story "Ezo Zankyo Den" by Sai Kurasima

# 小川原脩のさし絵展

# 蝦夷残侠伝

倉島斉作

デッサンが十分だから動きがいい。
墨の濃淡が空間で効いてムードを盛る。

そして実在の人物を正面から描いたときの
強く深い表現力。（美術評論家・月刊『ダン』編集長　竹岡和田男）

2021.4.25 Sun – 7.11 Sun

小川原脩記念美術館第2展示室

開館時間／9:00～17:00（入館は16:30まで）　休館日／毎週火曜日
観覧料／一般500（400）円、高校生300（200）円、小中学生100（50）円（　）内は10人以上の団体料金　展覧会初日は観覧無料

小川原脩生誕110年　倶知安町開基130年

小川原脩記念美術館
Shu Ogawara Museum of Art

〒044-0006 北海道虻田郡倶知安町北6条東7丁目1（0136-21-4141）
http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/

『蝦夷残侠伝』は、1974～75年にかけ、雑誌「月刊ダン」（北海道新聞社）に連載された倉島齊（1932-2011）の時代小説です。小川原脩はこの連載小説1話につき2～3点の挿絵を担当しました。その数36点。連載中の1974年、倶知安町文化福祉センター落成記念の回顧展でそのうち20数点が展示されましたが、その後、まとまった展示の機会はありませんでした。小川原が手掛けたものでは珍しい水墨画風、そして力強い人物描写が目を惹きます。新たな小川原脩の魅力をご覧ください。

**時代ものというだけで難しいのに、しっかりした性格描写と抜かりのない考証。そんなときに、小川原さんだ、と思い当たって倶知安行きの列車に飛び乗った。**

**（美術評論家・月刊『ダン』編集長　竹岡和田男）**

## 小川原脩　Shu OGAWARA 1911-2002

北海道・倶知安町生まれ。旧制中学（現・倶知安高校）で油彩を始める。東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科に入学。在学中に「納屋」（1933年）が帝展に入選。卒業後、福沢一郎らと出会い前衛的な美術団体「エコール・ド・東京」「創紀美術協会」「美術文化協会」などの結成に参加。シュルレアリスム絵画への道を歩んだが、軍の規制が厳しくなり断念。その後、軍の命令により戦争記録画を制作。

戦後は郷里・倶知安に戻り、岩船修三、木田金次郎らと「全道美術協会（全道展）」の創立に参加。1958年、野本醇、因藤壽、穂井田日出麿らと「麓彩会」を創立。1975年、北海道文化賞受賞。1994年、北海道開発功労賞受賞。この年、小川原脩画集（共同文化社）を出版。

戦後、倶知安町に定住してから半世紀以上、新たな造形の可能性を求め続けたが、とりわけ70歳を目前に訪れた中国、チベット、インドでの体験を契機として創作の新境地を拓いている。

## 倉島 齊　Sei KURASHIMA 1932-2011

札幌市生まれ。小説家・シナリオライター。「くりま」同人。昭和44年「歳月の小車」が北海道新聞文学賞佳作。翌45年「老父」で第二回新潮新人賞を受賞、受賞後第一作の「兄」が芥川賞候補となる。家族の絆の不条理が一貫したテーマとなる。また「絆」「ちりりん　ちりりん」などラジオドラマを手掛け文化庁芸術祭優秀賞を受賞。テレビドラマでは「札幌物語・朝の手紙」がある。

## 蝦夷残侠伝あらすじ…

時代は長州征伐で世情騒然たる幕末。主人公・与惣次（よそじ）は越後長岡の老舗の跡取りだったが、義理を立てて家を去り、江戸の巷で暮らしている。棒術の心得のある与惣次は、品川の宿場に売られ自死した女・お雪の仇をとるため、市井の悪、常五郎親分を痛めつけた。その常五郎の背後には、江戸市中取り締まりの新徴組がついていた。新徴組十番隊に捕らわれの身となった与惣次に、どんな運命がまっているのか。江戸～越後長岡～蝦夷地へと至る幕末歴史ロマン！

**●同時開催**

小川原脩展「Shu Ogawara 1911-2002」

2021年4月25日（日）～7月11日（日）

小川原脩記念美術館
Shu Ogawara Museum of Art

〒044-0006　北海道虻田郡倶知安町北6条東7丁目1（0136-21-4141）
http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/